内野一人百首(Ⅲ)

清水　氾

（五一）

遠国に遊び飢えけむ子を待てる
父が藻塩の身もこがれつつ

藻塩（もしお）とは古代の製塩法のひとつである。海草を簀の上に積み、塩水を注ぎかけて塩分を多く含ませ、これを焼いて水に溶かし、その上澄みを釜で煮つめて塩を製する方法である（日本国語大辞典）。

風のない夕方などは、海辺のあちこちで海女が藻を焼く煙が立ち上り、淡路島松帆の浦の名物となったのだろう。松帆の地名を「待つ」にかけ、焼けこげる藻を心はもちろん「身も」とたとえ、いつになっても姿をあらわさない男を待つ女、おそらくは海女自身の切ない思いを、定家が代って詠んだ歌である。ことばのあやが美しく、景と情とが相まって、古来名歌とされている。聖書にも、来ぬ人を心まちにまちつづけた人がいる。福音書に名高い放蕩息子の父親である。父親が毎夜、子を待ちわびていたとは記されていないが、「まだ遠く離れていたのに、父親は息子をみつけて」（ルカの福音書一五・二〇新共同訳）という描写に、身をこがれつつ待びわびていた男の姿を見ることができる、多くの画家が手がけたのも当然と思われる名場面である。

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ
権中納言定家

（五二）

救はれん汝（なんぢ）の家族も救はれん
地震（なゐ）にねざめしピリピ牢守

江戸時代の花柳界では辻占売りが「淡路島かよう千鳥

の恋の辻うら」と呼び声をあげて、辻占（運勢を占う文句を記した紙片）を売り歩いた。その本歌であるこの一首は、淡路島から須磨へと渡ってくる千鳥のかなしい鳴き声にねむられない須磨の関所の番人のわびしさを歌っている。

使徒行伝一六章には、占い女がいる。関守ならぬ牢守がいる。千鳥の声ならぬ地震のひびきがきこえてくる。それゆえに、この一六章は大切である。パウロは生涯の弟子テモテに洗礼をさずけた後、マケドニヤの幻にしたがってピリピの町に赴く。ここで、リディアとその家族に洗礼をさずける。

この町で占い女たちのざん言を受けて、パウロとシラスはむち打たれ投獄される。その牢の番人が地震をきっかけにしてイエスを信じ、家族もろとも洗礼を受けている。

一六章には占いを、占星術を、あらゆる吉兇をこえた力強い救いの宣言「主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救はれん」（三一 文語訳・以下断りなきはすべて文語訳）が高らかにひびいている。

淡路島かよふ千鳥のなく声にいく
夜ねざめぬ須磨の関守

源　兼昌

（五三）

きりぎりす神の日の出に飛び去りて
その在り所をば知る人もなし

和歌の世界ではきりぎりすとこおろぎは秋虫の代表とされている。その鳴く音が、秋から冬に入る情をうたうからであろう。「鳴けや鳴け蓬が杣のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞ悲しき」（曽根好忠）や、「なにゆゑに生きてゐるかと問ふごとく霜夜を細きこほろぎの声」（安田章生）などが古今の好例と挙げられよう。

百人一首の藤原良経の歌も〝さむしろ〟（幅の狭い、或いは短い筵）に〝寒し〟をかけて、衣を双つでなくひとつ敷く、かなわぬ恋のひとり寝を歌った、調べある歌である。

ばった・きりぎりす・いなごなどの類の grasshopper は聖書に九種類登場する。そして、移ろう季節の情を歌うのではなくて、人の多く集まりたちまち四散する（寒

い日には城壁の間に身をひそめ／日が昇ると飛び去り／どこへ行くのかだれも知らない・ナホム三・一七新共同訳）様や、人の老い衰え行く（蝗もその身に重く／その嗜欲は廃る・伝道書一二・五）様をたとえるのに用いられる。そして、人生のはかなさの向うに神の不変の堅固を見せようとする。

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに
衣かたしきひとりかも寝む
後京極摂政前太政大臣

（五四）

むらさめの露したたりて神の恵みの
霧たちのぼり雨とふりつつ

寂蓮法師の歌は、村雨がひとしきり来て、杉の葉に露を残して去って行った、その露がまだ乾かないのに、もう霧が立ち上っていると、視覚的に秋の夕暮れを描いて美事である。

法師がこの夕暮れに見たのは単なる自然の美だけではあるまい。法師は、霧という細かい水滴がやがて水蒸気として空にのぼり、雲となり、再び村雨となって降ることを知っていたからこそ、このような静かな美しい調べを得ることができたのだ。自然の中に秩序と法則を見る日本文学の典型的な歌といえよう。

ヨブもまた、苦しみと悲しみの中で、この秩序を見た詩人であった。

神は水のしづくを引き上げ
それが神の霧となって
雨をしたたらせる
雨雲がこれを降らせ
人の上に豊かに注ぐ（三六・二七、二八新改訳）

雨にぬれたレバノンの杉、露もまだひぬその葉から立ち上る霧は、ヨブにとっては、神の代理をするもの、神のさばきと神のめぐみとを人々に教えるものであった。

むらさめの露もまだひぬ真木の葉に
霧たちのぼる秋のゆふぐれ
寂蓮法師

（五五）

いま言ふなといひしばかりに涼殿（すずみどの）の
窓のにほひにまどはされたり

「いま来む」は当時の会話語で、シー・ユー・スーン「すぐ来るよ」であろう。そのスーンを信用したが、すぐはおろか、何日も何週も姿を見せず、代りに長月（陰暦九月）の月が、空にありながら夜が明けてしまったという、待ちぼうけをユーモラスに大事めかして詠んだ歌である。

「言ひしばかりに」がこの歌の男女の中の微妙をあらわしているが、聖書にも待ちぼうけの場面、こう言ったばかりに大事を招いてしまったせりふがある。士師記三章一九節である。

左利きのエフデがモアブの王エグロンに貢物を献げる。その際、秘密の知らせを仄めかすエフデにエグロンが「今、言うな」（新改訳）と言う。これを新共同訳は「黙れ」口語訳は「さがっておれ」と訳し、文語訳は解説的に「王人払いを命じたれば」と訳す。

この「今、言うな」が災いして、エグロンは屋上の涼しい部屋で命を落とす。王の腹から出た汚物（新共同訳）のにおいにだまされて、護衛の兵たちは王が涼殿で用を足していると思い、まちぼうけを食わされる。そのすきにエフデは王宮を脱出する。

いま来むといひしばかりに
長月の有明の月を待ちいでつるかな
素性法師

（五六）

名にし負ふシャロンの野花と見るまでに
内野の里がはぐくみし娘（こ）ら

これもまた有明の月の歌であるが、これは「と見るまでに」という、見立（なぞらえること）を技巧の中心とする。吉野の里一面に降り敷いたのは春近い薄雪、いや、春の淡雪であろうか。その雪の白さが有明の月の光「と見まがうほど」であると詠むこの歌は、写生の歌でも、言葉の技巧の歌でもない。言うなれば、想像力の技巧、見立による歌である。

聖書にも、読者の想像力を「と見るまでに」かきたてる風物が多い。そのひとつに、シャロンの野花がある。

シャロンの平原はカルメル山とヨッパの間を地中海ぞいにひろがっている。古来、牛（歴代誌下二七・二五）羊（イザヤ六五・一〇）や野花（雅歌二・一）、つまり、豊饒と美で世界に知られた平原である。

一九九五年三月六日、東京基督教大学は第二回卒業生を送り出した。福音を携えて世界に出で立つ男子一九名女子二三名に捧げた歌

レバノンと言はじ内野の香柏は秀枝（ほつ）も若く移されんとす

シャロンと言はじ内野に生ひし野花ありて今ふくよかに匂ひぬるかな

のひとつを是則の歌に見立てて詠んでみた。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれるしら雪

坂上是則

（五七）

心あさき富める者をば針の穴と
入りまどはせる天国の門

白菊の園に初霜が降った晩秋、いづれが菊かいづれが霜かと興じている属目（しょくもく）の歌ではない。菊の白い美を印象的に伝えるために初霜のういういしい白さと置き並べる技巧、つまり、誇張法という譬（たとえ）の歌である。これに気付かなかった正岡子規は「初霜が置いた位で白菊が見えなくなる気遣無之候」（「歌よみに与ふる書」）とけなしている。

聖書の誇張法の好例はイエスの譬話にある。永遠の命を求めてイエスの許に来たが、「己の如く汝の隣を愛すべし。汝の所有を売りて貧しき者に施せ」と言われ、悲しみつつ立ち去った富める若者の姿を印象的に見せているのが「富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の穴を通るかた反って易し」（マタイ一九・二四）の誇張法であると言えよう。

共（有財）産主義に挫折して聖書に赴いた太宰治は「私の最初のモットーであり、最後のモットー」（「返事」）と隣人愛の教えに心を深くしたが、結局はイエスの譬話を「駱駝が針の穴をくぐるとは、そりゃ無理な。出来ませぬて」（「古典風」）と心浅くけなし、イエスの許を去ったのである。

心あてに折らばや折らむはつ霜の
置きまどはせるしらぎくの花

凡河内躬恒

（五八）

月明き瀬戸の小島に明けぬるを
真夜の祈りとひたに思ひき

現代人は満月には嘆声をあげるが、新月・上弦・満月・下弦という月の満ち欠けを眺める余裕を持たない。ましてや、夜毎に変化する立待月・居待月・寝待月などは、眺めることはおろか、名称すら失ってしまった。

下弦の月を宵から観賞しているうちに、夜明け近くなってしまった。月は西空のどこに宿をとるつもりなのかと、月に見とれて夜を徹した感動をこめた歌である。

現代人が失ってしまったもうひとつは、「慎みて目を覚しをれ」（ペテロ前書五・八）の徹夜の祈りである。中世の信仰者たちは、仏教徒にせよ基督教徒にせよ、大切な祝日の前夜を徹夜の祈り vigil に捧げた。預言者サムエルは夜通し主に叫び（前書一五・一一）、キリストは「神に祈りながら夜を明か」（ルカ六・一二）した。『真夜の祈』（新地書房）を残したハンセン氏病者の玉木愛子（一八八七～一九六九）は長島愛生園で夜通し祈った。失明した愛子はその目で月を見ることはなかったが、心とからだでいつも月の満ち欠けを楽しんでいた。

明け易し真夜の祈りと思ひしに
はしゃぎて問へば無月と答へらる

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月やどるらむ

清原深養父

（五九）

生るれば死ぬるものとはしりながら
なほ持たまほし永遠のいのちを

二十三歳で没した道信（九七一～九九四）にもう一首「朝顔を何はかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見るらめ」がある。人は花を槿花一日と見るが、花も人を栄華一日と見ると巧みに、花と人をひとしなみ（等並）にする。

百人一首の道信の歌も同じ巧みの歌である。夜明けは必ず日暮れとなり、朝別れたあなたに必ず会える夜が来る。とは言うものの、夜明けはやはり恨めしい。「明けぬれば暮るる」の論理と事実が、「なほ恨めしき」の心理とゆめとにからまって、別れの辛さと逢うの楽しさを深める。

私たちの人生の根本に於ても、生死の論理と心理とが絡まりあう。生まれれば必ず死ぬ人間を大日経は〝生者必滅〟と喝破し、伝道の書は〝空の空、空の空なる哉、都て空なり〟と歌う。そして、それ故にこそ、人間は永遠を希求し、その「人の心に永遠をおもふの思念（おもひ）」（三・一一）を神がお与えになる。だが、永遠の思念だけでは十分ではない、聖書は生と死の論理と心理の絡みあいを解くにはもうひとつ〝罪〟という事実が必要だと説く。「罪によって死が入った」（ロマ書五・一二新改訳）からである。イエスはこの罪と死の鉄鎖を砕くべく、十字架にかけられる。

明けぬれば暮るるものとはしりな
がらなほ恨しき朝ぼらけかな
藤原道信朝臣

（六〇）

木にて罪をおかせしをとこ耕やして
をみな孕みて苦をば味はふ

下句で文と踏みを掛け、上句で生野と行くを旅の縁でつなぎ、歌枕大江山ではじめ、歌枕天の橋立で終える巧みの歌である。小式部内侍一五歳の歌ときけば、「踏み」で母恋しと言い「文」で母の世話にはならぬと言う、その若さの矛盾がほほえましい。しかし、それから十年も生きることなく天折したと知ったうえで、「生くのの道の遠ければ」と朗めば、長き生涯を生きたしの思いが読む者の心に哀切にひびく。

旧約聖書も掛詞や縁語や歌枕を駆使する。神は語呂合せの中にその姿を垣間見せると言われている。たとえば、創世記最初の詩には女イシャ・男イシュの語呂合せ「深く眠るイシュより取りしイシャこそわが骨の骨わが肉の肉」（二・二三）がある。また日本語の枕詞、垂乳根の母の感慨にも似たエバの命名「苦しみの中に妻をばハバと呼ぶすべてのハイの母なればなり」（三・二〇）にも語呂合せがある。更に、ヘブル語のエーツ（木）とエツェブ（苦）とには、意味と音との二重の縁がある。人の苦しみ

は木に始まったが、その苦より人を救うべく、イエスは木にかかられた。聖書は木に始まり木に終わると言われているが、ここにこそ世界大の掛詞、生死と永遠の縁語があると言えよう。

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみも見ずあまの橋立

小式部内侍

（六一）

しののめのシオンの丘にしのぶれど
あまりてなどかタマルこひしき

〝しのぶ〟を忍ぶ（古くはしのふと読んだ）と書けば我慢する、隠れるの意となり、慕ぶ（または偲ぶ）と書けば、はなれている人をひそかに思うの意となる。源ひとし朝臣の歌は両意を含み、野原に茂る丈の低い茅に忍ぶ男の姿と、その忍ぶ恋心とが、序詞である上句からひしひしと伝わってくる。

ダビデ王の長男アムノンは忍ぶ恋の男であった。その様子をサムエル後書一三章から引用しよう。

その後のことである。ダビデの子アブシャロムに、タマルという名の美しい妹がいたが、ダビデの子アムノンは彼女を恋していた。アムノンは妹タマルのために、苦しんで、わづらうようになった（新改訳）。

異母妹との結婚は当時は禁じられてはいなかったが、ソロモンを十男とする王家では、アムノンとタマルの結婚には王位継承権がからみ、困難であった。悶々と眠れぬアムノンは、明け方の陽の光に色どられ、しののめのシオンの丘に忍び、しののめのように美しいタマルを偲んだことであろう。だが、忍び切れぬアムノンは処女タマルを犯す。そして王家の悲劇が始まる。ちなみに、しののめは古来「忍ぶ」の序詞である。

浅茅生の小野のしのはらしのぶれど
あまりてなどか人のこひしき

参議　等

（六二）

しらつゆに風のふきしく野に散れる
小く圓きぞ神の真菜なる

秋の野に白く降りた露が光っている。吹きしきる風に打たれて野に散る白露は止め糸から外れた白玉であるとうたうこの歌は、露をうつくしとして、玉にたとえる日本の美学の伝統の中にある。日本には、もうひとつ、「秋風にしばしとまらぬ露の世を誰か草はのうへとのみ見ん」（明石中宮）の昔から「今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅の光」（伊藤左千夫）の今に到る、露をはかなしと見る伝統がある。

聖書は露を〝ほろびの光〟と見ない。創世記の昔から「天の露と地の肥沃」（二七・二八）と対にして〝恵みの露〟を讃える。この露が、やがてイスラエルの心に刻みつけられる。

朝におよびて露営の四囲におきしが、そのおける露乾くにあたりて曠野の表に霜のごとき小き圓き者地にあり、イスラエルの子孫これを見て此は何ぞやと互に言ふ。（出エジプト記一六・一三～一五）

〝何ぞや〟をヘブル語でマンと言う。以来、この露の恵みはマナ真菜と呼ばれてきた。はかない露を恵みに変えた曠野の奇跡から生まれたこの一首の下句を「圓きに叫ぶこは何ぞやと」読みかえることもできよう。

しらつゆに風のふきしく秋の野は
つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
文屋朝康

（六三）

イゼベルのつるぎ逃れて思ひ入る
荒野のおくにえにしだの糧

人の道がすたれ果てたこの世を遁れようと出家遁世を思い（立って、山に）入ったが、その奥山でも妻を恋う鹿の声をきいた。西行の出家にさそわれるように山に入った俊成は二十七歳だった。しかし、鹿にさそわれてか、すぐこの世に戻った。六十三歳で改めて出家したという。

エリヤはバアルの預言者たちを殺した。バアルを信じる王アハブは、バアルをイスラエルにもたらした妻イゼベルにこのことを告げた。イゼベルはエリヤを殺すと宣言した。これを恐れてエリヤはベエル・シェバに逃れた。「一日程ほど曠野に入往きて金雀花の下に坐し其身の死なんことを求め」（列王紀略上一九・四）た。

えにしだの木陰で彼はパンと水を与えられ、四十日歩いて神の山ホレブに着いた。そこで彼は風神でも雷神で

も火神でもない、真の神の静かな細い声を聞き、イスラエルを敵と偶像とから救う仕事を与えられる。

鹿の声によって俗世に戻った俊成、神の声によって世を導いたエリヤ、いづれも「えにしだ」と叫びたい。

ラテン語の genista がオランダ経由で日本に来てエニスタと呼ばれた。それを「縁」（えにし）にかけて〝えにしだ〟とよばれるようになったのが金雀花である。

世のなかよ道こそなけれ思ひ入る
山のおくにも鹿ぞ鳴くなる
皇太后宮大夫俊成

（六四）

朝ぼらけヨルダンの川きり流れ
あらはれわたる十二の石塚

軍書にも歌書にも名高い山城国宇治川の夜明け、朝日が金色に染めた霧の晴れ間の川瀬川瀬に、氷魚（ひお）を捕るべく仕掛けた網代木が見えてくる。宇治川の美しい冬を詠んだ叙景歌の裏から、宇治十帖（じょう）（源氏物語の最後の十帖）の主人公、薫と大君、ついで浮舟との悲恋の物語が聞こえてくる。

パレスチナの四季を通じて流れるヨルダン川は、イスラエルの唯一の川であるが故に、歴史の多くの物語を秘めて流れている。エジプトを逃れたイスラエルの人々はこの川を渡り、ヨルダン西岸の乳と蜜の流れる地を取ったが、その渡河の様子はヨシュア記三章と四章に詳しい。

契約の箱をかついで民が川を渡りおえたとき、「ヨルダン川の真中で、祭司たちの足が堅く立ったその所から十二の石を取り、それを持って来て、あなたがたが今夜泊まる宿営地にそれを据えよ」（四・三新改訳）との神の言が与えられた。後の世のイスラエルの子らがこの石塚を指して、父たちに「これらの石はどういうものなのですか」と尋ねるのであった。

湯浅半月に『十二の石塚』（一八八五）という日本近代史上最初の個人創作詩集がある。古き皮袋に新しき酒を盛ろうとしたわが敬愛するクリスチャン詩人の試みである。

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
あらはれわたる瀬瀬のあじろ木
権中納言定頼

（六五）

偶像をさせもが露と立たしめて
あはれ数多の民ほろびたり

佳く萌えるので佳萌草と呼ばれるこの菊科多年草は、若葉を摘んで餅に入れるから〝もちぐさ〟、また乾して灸治療に用いるから〝もぐさ〟とも呼ばれている。これを副詞のさしも（あれほど、それほどまで）に通わせて〝さしもぐさ〟という風雅な名もある。

七世紀半ば、鎌足の忌日に維摩経を興福寺で講じる維摩会（ゆいまゑ）という法事が始められた。基俊は、息子である興福寺の僧光覚をその講師にするとの約束を一族の氏長者忠道から与えられたが、それが空約束となったのを恨み、この歌を詠んだ。

あれほど（さしも）約束して（契りおきし）下さったのに、それを命の露とたよりにしてきたのに、息子は講師になれなかった。甘露のお約束ははかないつゆだったのでしょうかと、恨みの丈を言葉の限りに尽くしている。

聖書はその十戒の第二戒に「何の偶像をも彫むべからず」（出エジプト記二〇章）と固く戒めている。それなのに諸国の民は、太陽を大河をバールをアシュラを拝み、そのさせもが露を命として亡んでいった。イスラエルすらも、唯一の己が神をデラフィムと彫んで（創世記三一）、流離捕囚、興亡離散の歴史を始めるのであった。

契りおきしさせもが露を命にて
あはれことしの秋もいぬめり

藤原基俊

（六六）

わたのはらこぎいでてみれば天地の
神の大道にまがふおほみず

聖書が日本に伝来したのはすでに百三十余年の昔となった。その間、多くの日本人が聖書に感動し、イエスの言葉に霹靂を感じた。或る者はその喜びを、他の者はその悔い改めを表現するのに、いづれも七五の調、和歌に依っている。その一人、大西祝（一八六四～一九〇〇）の歌

世の中は何はせずとも難波江の
よしあしのみはわけてゆかなん

は、嘘も方便式の情況倫理を越えた聖書（例えば十戒）の明晰さ峻厳さに打たれ、一番大切なものは善悪の区別であると悟り、それを日本文学の技巧、序詞や語呂合せに依って表現しようとしたものである。私はこれを「古き皮袋に新しき酒を」（日本語で福音を）盛る酒祝歌（さかほかい）の試みと呼び、内野一人百首をそのひとつと自負している。

法性寺入道前関白太政大臣藤原忠道の歌は「海上遠望」という題を与えられて詠んだ題詠であることは、まがう（区別しにくい）という語に示されている。藤原一門の氏長者の雄大な海の歌に匹敵するものを聖書に探せば、神は人の到りえぬ所に入り人のなしえざる事をなし給うとする詩篇七十七篇十九節に求めえよう。

なんぢの大道は海のなかにあり、
なんぢの徑はおほみずのなかにあり

わたの原こぎいでてみればひさかたの
雲居にまがふ沖つしら浪

法性寺入道前関白太政大臣

（六七）

夜をこめて鳥のなくねに主を否みし
心の水の乱れ知りたり

清少納言の歌は中国の故事をふまえている。斉の宰相孟嘗君は敵を逃れ函谷関に来た。日暮れに閉じ鶏鳴とともに開くこの関所に着いたのは〝夜を篭める〟頃、つまり、まだ夜が明けないでいる時刻だった。そこで、鶏の鳴き真似の上手な家来が〝鳥のそらねをはかり〟見事に関を脱けることができたという。

〝逢坂の関〟を越えるとは、男女が契りを結ぶことの婉曲表現である。昨日は鶏の声に追立てられて失礼したが今日は是非、と求める男に女が肘鉄砲を食らわせているのである。

聖書（マタイ二六章）では、そらねならぬ本物の鶏の鳴く音が人の心の乱れや弱みを露呈する。ゲッセマネの祈りを終えたキリストが捕らえられた。「死ぬべきことありとも汝を否まず」と誓ったペテロは、主の身を案じ中庭に居た。女中の一人が、イエスと一緒にいたペテロを見たと証言する。ペテロはこれを否む。同じ証言が二度三度つきつけられ、ペテロが二度三度、「我その人を知ら

ず」と否定した折しも、鶏が鳴く。英語では鶏鳴はクックアドゥドルドゥ、What did you do? お前はなんてことをしたのだ、と聞こえるという。

夜をこめて鳥のそらねははかるとも
よに逢坂の関はゆるさじ

清少納言

（六八）

もろともにあはれと思へ心おごり
主をあざむきしサピラアナニヤ

〝あはれ〟は日本文学の中心句のひとつであり、人の心の様ざまな思い、喜びと悲しみ、讃美と嘆き、愛情と愛憎、願いと諦めなどを表わす感動詞や形容動詞としてしきりに用いられる。行尊は高名な天台修験者、一二歳で出家している。だから、美しさをのみ賞美されてきた山桜に、ひとり山に篭るわが身を映して、喜びも悲しみも分け合おうと呼びかける折おりがあったにちがいない。

聖書の〝あわれ〟は感動詞ではない。また、〝あわれむ〟〝あわれみ〟は賞美や喜びを意味する動詞や名詞ではない。「すべての人の中で一番哀れな者」（コリント前書一五・一九新改訳）と否定的に、また、人をあわれむ神の「あわれみ」（創世記一九・一六他）と肯定的に用いられている場合が多い。

使徒行伝五章にアナニヤとサッピラの夫婦が登場する。使徒の働きを支えるため地所を売ったが、代金の一部を隠し、残りを献げた。そのため、貪欲の罪ではなくて聖霊を欺いた罪によって、アナニヤは聖霊に打たれて死んだ。それから三時間たって、サッピラもまた聖霊を欺き、聖霊に打たれて死んだ。アナニヤは〝恵み〟を、サッピラは〝美〟を意味するときくと、ますますあわれでならない。

もろともにあはれと思へ山ざくら
花よりほかに知る人もなし

前大僧正行尊

（六九）

ジュベルムーサ燃えてつきざる火の柴は
いまひとたびの顧みの山

藤原忠平の諡（死後のおくりな）を貞信公と言う。宇多上皇の伴をして遊んだ嵯峨の小倉山で、上皇がその子醍醐天皇にこの紅葉を見せたいと望んだとき、忠平が応えて詠んだ歌である。天皇のおでかけ「いまひとたびのみゆき」と言えば、紅葉すら色あせず待つと歌い、君主の威光と紅葉の美を詠んだ名歌とされている。

旧約聖書の民が「いまひとたびの」と待ち望んでいるものは神の「かえりみ」である。まことに、天地創造の神の最大の恵みは顧みにある。

ヨセフはエジプトで死ぬとき、「神は必ずあなたがたを顧みてくださるから、そのとき、あなたがたは私の遺体をここから携え上」（創世記五〇・二五新改訳）れとイスラエルに命じた。こうして出エジプトの大業が始まった。

四〇歳のモーセは羊を追いながらシナイ山、現在ジュベル・ムーサ（モーセの山・二二八五米）と呼ばれる山に来た。神の使いが「現われた。柴の中の火の炎であった」（出エジプト記三・二新改訳）。モーセはここで顧みる神に会い、「イスラエル人を顧みる心」（使徒七・二三新改訳）が起こった。小倉山の紅葉が君主の威光の徴なら、シナイ山の燃える柴は神の顧みの徴である。

をぐらやま峰の紅葉こころあらば
いまひとたびのみゆきまたなむ

貞信公

（七〇）

天にある更に勝れるふるさとの
春告花は宇内を見守る

貫之がなじみにしていた初瀬の宿の女主人が、何ケ月ぶりかにそこを訪ねた貫之に、お忘れになったのかと皮肉る。それに応えて、梅の枝を手に貫之が詠んだのがこの歌である。古里の心の梅は昔のままだが、そんな皮肉を言うあなたの心はどうかと、これまた皮肉に答えている。

こうした皮肉な背景は知らなくとも、故郷の花の変わらぬ香を歌った歌としてなつかしく愛されている。

地上の故郷よりもっとすばらしい故郷があると聖書は言う。パウロはヘブル書で先祖の族長たちを偲んだ後「しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていた」（一一・一五、一六新改訳）と記す。

日本の故郷の花は貫之の梅であり、友則の「春の日にしづ心なく散る」桜である。そして、聖書の天の故郷に咲いているのは巴旦杏（はたんきょう）、ヘブル語でシャーケードと呼ばれるあめんどう春告花である。幻にその枝を目にしたエレミヤに主は「わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っている（シャーカードと音をかえると〝見張る〟を意味する）」（一・一二新改訳）と応じる。歴史を見張る創造主の姿が、アーモンドの花を神の宇宙計画のシンボルにまで高めているのである。

人はいさ心も知らずふるさとは
花ぞむかしの香ににほひける
紀貫之

（七一）

夕されば血の門柱（かどばしら）おとづれて
滅ぼす者が風と過ぎ越す

「おとづれる」という動詞は、訪問するとか手紙を書く意味のほか、昔は音を立てる意味に用いた。「音を立てる意味から、戸をたたくことの印象が強くなり、訪問の意になった」（『国文学の発生』折口信夫）のである。

宵闇の中で門前の稲葉をさやさや鳴らす秋風が、やがて門扉をたたき生垣を鳴らし、山荘に吹き込んで来る。その様子が耳にきこえ目に見えるようだ。夕のさわやかさと秋のさわやかさを重ねた故の名歌とされている。

音が耳にきこえ目に見えてくる光景が聖書にもある。エジプトの王パロは貴重な労働力であるイスラエル人を出国させなかった。神は血の川水、蛙、ぶよ、あぶ、疫病、腫物、雹、いなご、暗黒と九つの災害を与えたが、パロの心はかたくなだった。その心を砕いた最後の災害はパロの家から家畜小屋に及ぶ初子の死であった。こうして許された出エジプトの記念として過越の祭が制定された。今もイスラエル人は生まれたての小羊の血を門の鴨居と柱にぬり「主がその戸口を過ぎ越され、滅ぼす者があなたがたの家に入」（出エジプト記一二・二四）らなかった夕を感謝して祝うという。

夕されば門田の稲葉おとづれて
あしのまろやにあき風ぞ吹く
大納言経信

（七二）

雲に包まれ引き上げられて死者も生者も
主の日の末にあはむとぞ思ふ

「瀬が早いために岩に遮られる滝川とおなじように、たとえ一度は別れ別れになっても、行末はかならずまた逢おうと思う。」（安東次男）

これは単なる自然の情景でなく恋歌である。しかし、また単なる恋歌でもない。皇位を奪われ院に遷された崇徳の嘆きや政治的不満がこめられている。「早み」「せかるる」「われても」と三つの動詞の連打が、崇徳院の心をよくひびかせている。

初代クリスチャンたちも、使徒行伝にあるように、迫害されて嘆き、追放の身をかこったりした。しかし彼らは、「われても末に会わん」とキリストの復活に望みをかけたのである。そうした群のひとつ、テサロニケの信者たちをパウロは、「兄弟たちよ。眠っている人々については無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のよう」（第一テサロニケ四・一三口語訳）に悲しむなとはげましてから、その再会の様を、死んだ人びとが「よみがえり」生き残った人びとと「雲に包まれて」「引き上げられ」「空中で主に会い」いつまでも「主と共にいる」と望みにみちた動詞を五つ重ねて描写している。これは私の愛誦聖句のひとつである。

瀬を早み岩にせかるる滝川の
われても末にあはむとぞ思ふ
崇徳院

（七三）

造り主の姿に倣（なら）ふ人となりぬ
鏡にかすみ立たずもあらなむ

桜前線は何週間かかけて日本列島を北上するが、吉野山の桜は外山（人里近い麓の山）から奥山へと数日かけて上って行く。だから、高砂の尾上（高い山の峯）の桜は「咲きにけり」の詠嘆にふさわしい有終の美を呈する。匡房はその美しさを「立たずもあらなむ」、隠さないでほしいと外山のかすみに訴えている。すなおな気持が格調高くひびいてくる。

耳をすませば、聖書からも「立たずもあらなむ」の切実な訴えが聞こえてくる。パウロはコリントの教会の

人々に向かって、私たちは来るべき神の御国の姿の「今、鏡におぼろに映ったもの」を見ているが、やがて再臨の時には「顔と顔とを合わせて見る」（第一コリント一三・一二新改訳）と言う。

コリント産の鏡は銅など金属の表面を磨いたもので、手入れを怠たれば、おぼろな映像がますますかすむものであった。私たち二十世紀末の日本の教会も、霊的な意味で、来るべき御国と自らの姿とを鏡に映して見ていると言えよう。その鏡のかすまぬよう祈りたい。私たちが「鏡のように主の栄光をうつし出す」（第二コリント三・一八新共同訳）日を望みつつ「造り主の姿に倣う新しい人」（コロサイ三・一〇新共同訳）となるよう祈りたい。

高砂の尾上のさくら咲きにけり
外山のかすみ立たずもあらなむ
前中納言匡房

（七四）

母の胎に宿りし夜をば呪ひてより
暁ばかり憂きものはなし

月が天に有りながら夜が明ける頃の有明の月に冷たい女の仕打ちを隠して、あの朝の別れ以来、夜明けがつらくなったとかこつ歌である。

聖書には「暁ばかり憂きものはなし」と、男女の恋の苦しみをうたった歌はない。しかし、聖書を神と人との相聞歌集と見れば、「暁ばかり」の嘆きが聞こえて来ないでもない。

神の恵みの下に栄えていた族長ヨブは突然、家畜を奪われ穀物を焼かれ、七人の息子と三人の娘を一緒に大風に失った。その上、自分の身体全体も悪性の腫物におおわれ、妻からは「神をのろって死になさい」とののしられる始末であった。ついにヨブは口を開き「私の生まれた日は滅びうせよ。男の子が胎に宿ったと言ったその夜も」（三・三新改訳）と呪い、「暁のまぶたのあくのを見ることがないように」（三・九新改訳）とつぶやくのであった。

だが、神は忍耐強かった。ヨブと理を尽くして問答する。この問答を私は相聞（あいぎこえ）ととる。この長い相聞の末にヨブは「私はただ手を口にあてるばかりです」（四〇・四新改訳）と信頼の声をあげる。そしてヨブに主の恵みと族長の栄えとが回復されるのである。

有明のつれなくみえしわかれより
暁ばかり憂きものはなし

壬生忠岑

（七五）

食ふ者より湧き出でにける食物は
士師がなめたる獅子の死屍の蜜

謎かけ謎ときは、平安時代このかた日本文芸の刺激的な一項であった。枕草子の冒頭「春は曙」なる一文は「春は？」と尻上りに問うて、間を置き、「曙」と答えるナゾの仕立てをとっているとされる。

列樹の歌も謎かけ謎ときの仕立てである。柵（しがらみ）とは、流れてくるものをせきとめるために川の中に杭を立て、それに柴や竹をからませたものである。秋深い山中の川に散り紅葉がたまっていた。誰かがかけた柵かと近寄ってみると、柵ではなく、たまったまま流れずにいる紅葉であった。その光景を「風がかけた柵」とは何かと軽妙に問い「流れもあへぬ紅葉」と華やかに答えている。

旧約聖書士師記一四章に、名高いサムソンの謎がある。若獅子を手で殺したサムソンは帰り途、その死体から蜂蜜をとってたべた。祝宴の際サムソンは賞品をかけて謎を出す。

食べる者から食べ物が出た
強い者から甘いものが出た

答えられなかった客達は彼の妻をおどして、涙仕掛で答を得させる。宴の七日目、日没前に客達は答える。

蜂蜜より甘いものは何か
ライオンより強い者は何か（新共同訳）

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬもみぢなりけり

春道列樹

[Abstract in English]

An Anthology of Christian Tanka Poems Based on the Ogura Anthology

H. Shimizu

The Ogura Anthology of one hundred waka poems, or tanka poems as they are now called, has been a best-seller in every century since its compilation in the 13th century by Fujiwara-no-Teika (1162–1241 ad).

A waka consists of two parts, the upper hemistitch with three lines in a pattern of 5-7-5 syllables and the lower hemistitch with two lines of seven syllables each. In the beginning of the 17th century, a memory game of cards based on the Ogura Anthology was devised. A group of players is given a set of one hundred cards, each card containing only the second half (the lower hemistitch) of one of the poems. The players are divided into two groups which sit on the opposite side of a tatami (woven straw) mat. Each group spreads its own fifty cards on the tatami mat. The game also requires a reader who keeps another set of one hundred cards with a complete waka printed on each card and who reads each waka one-by-one. Both sides listen carefully to the reader. As soon as the reader begins to recite a poem, the players try to be the first to match that poem with the corresponding card lying on the tatami mat. It must be remembered that the card on the tatami-mat has only the second half of the poem printed on it. Each side tries to get the most “matches,” and thus the most cards. A sharp player who knows by heart every waka in the Okura Anthology can pick up the correct card as the first syllable is read or even as the first sound in that syllable is pronounced.

It could be said that the Ogura Anthology and its associated card game symbolize the Japanese mind and imagination. It is my desire to make a Biblical/Christian version of each and every waka in the Ogura Anthology and, in this way, to contextualize the Biblical stories into the form of Japanese literature.

For several years I have been publishing my Christian versions of these poems in this journal, Christ and the World. This 1996 issue contains the third set of poems. My goal is to create and publish Christian versions of all one hundred waka (or tanka).

To illustate my procedure, let us consider the first waka of this third volume. This waka happens to have been composed by Teika himself.

ko nu hi to o	For one who comes not
ma tsu ho no u ra no	I yearn; as, at Matsuho,
yuu na gi ni	In the evening calm,
ya ku ya mo shi o no	The salt-weeds are burnt aglow,
mi mo ko ga re tsu tsu.	So parch'd am I for desire.
	(Translated by Haruo Miyata)

In the fourth line we see the Japanese phrase, "mo shi o." We may note that mo (sea-weeds) + shio (salt) is an ancient way of salt-making, a well-known scene at Masuho Shore on Awaji island. "Ma tsu ho" implies "to wait for some one." Matsuho Shore, thus, means the Waiting Shore. The women divers were yearning (that is, burning) for their lovers who had not yet shown up. Their hearts were just like the smoke of the Waiting Shore.

Teika's waka reminds me of a New Testament figure, the father of the prodigal son in Luke 15. This father, when his son "was yet a great way off, saw him, and had compassion, and ran, and fell on his neck and kissed him." Here is my Christian version.

en go ku ni	For his son who went
a so bi u e ke mu	To a far country, only
ko o ma te ru	To idle away
chi chi ga mo shi o no	His time and starve, the father's
mi mo ko ga re tsu tsu.	Parch'd heart burned as the salt-weeds.